

四十路のおっさん、 神様からチート能力を 9個もらう



Yosoji no ossan, Kamisama kara
cheat skill wo 9ko morau

霧 KIRITO 兎

CONTENTS

目次

第2章

ファスティからオーゴへ

211

第1章

領都ファスティ

043

序章

四十路の転生

007

CHARACTER

主な登場人物

ヴォルフ

ノートの従魔その1。
聖獣フェンリル。
強くて大きくて、肉が好き。

ライ

ノートの従魔その4。
エレキバード。
賢くてカッコいい。

マナ

ノートの従魔その2。
あらゆる属性の魔法を
扱える大精霊。

マーク

ファスティの街の
門を守る衛兵隊長。
面倒見が良い。

ノート

異世界で9個のチートスキルを
手にした四十路のおっさん。
魔物グルメを極めるため、
冒険の旅に出る。

アクア

ノートの従魔その3。
スライム。
生まれて間もない。

序章

四十路の転生

Yosoji no ossan,
Kamisama kara
cheat skill wo 9ko
morau

プロローグ 何が起こった？

「誠に申し訳ありません！」

輝く金髪の美女が謝罪の言葉を口にする。

おっさんは戸惑いつつ尋ねる。

「とりあえず頭を上げてもらって……説明をお願いします。なぜ、俺はこんな所にいるのですか？」

おっさんの名前は、霧島憲人^{きりしまのりひと}。

ブラック企業に勤める四十二歳である。

帰宅途中、交差点で信号を待っていると、何者かに後ろから押された。それで車道に飛び出し、

トラックに轢かれそうになった瞬間、意識が途絶え――

気がつくと、真っ白い空間にいる。

そうして今、女性に頭を下げられていた。

女性は頭を上げると、申し訳なさそうに告げる。

「空間に歪^{ゆが}みができ、それを直そうとした際に、力が暴走してしまったようです。その力が霧島さんの体に当たってしまい……結果として、霧島さんはトラックに轢かれてお亡^なくなりになりました」

それから女性は、自分が何者であるかをおっさんに明かした。

彼女の名前は、セレスティナ。

いくつかの世界を管理する女神であるという。

おっさんは衝撃的な展開に混乱しつつ質問する。

「……つまり、俺が死んだのは間違いつてことなんですよ。だったら、生き返してもらうことは可能ですか？」

すると、セレスティナは首を横に振る。

「……申し訳ありませんが、霧島さんが亡くなった瞬間は大勢の方に見られています。そうになってしまうと、取り消すことは不可能なのです」

女神といえど、多数の人間の記憶を消すことはできないらしい。

セレスティナは苦しげにそう説明すると、その代わりとして、彼女が管理する世界の一つに転移させるというアイデアを提案した。

さらにおっさんには、望んだスキルを授けるという。

それを聞いて、おっさんはびっくりと反応した。

おっさん、本を読むのが好きで、いわゆる異世界転生物のラノベを何冊も読んでいる。

彼は少し興奮しながら確認する。

「女神様の言う世界とは、どんな所ですか？」

「霧島さんの世界で考えると、文明の基本的なレベルは欧州の中世に近いでしょうか。そうでありながら、剣と魔法が支配する世界と考えていただけたら良いかと……」

おっさんは笑みを浮かべた。

（はい来た、テンプレですね。どちらにせよ、元の世界には戻れないのだから、ここはもう腹をくくろう）

彼はいったん気持ちを落ち着かせ、さらに質問する。

「もう少し聞かせてもらっても？」

「もちろん。霧島さんに納得してもらえるまで、説明させていただきます」

「剣と魔法の世界と言っていましたけど……その世界では、人と人が争っていたりするんですか？」

おっさん、ファンタジーは好きだが、争い事は得意ではない。戦争のようなものには巻き込まれたくないと考えたのだ。

セレスティナが答える。

「霧島さんがいた世界以上に、争いが絶えない場所かもしれませんね。ただし、基本的には人と人の争いではなく、魔物との戦いが大半です」

（……魔物と来たか。まあ何となく想像していたが）

彼はいったん黙って考え込むと、質問を重ねる。

「……女神様の世界に移したら、俺には何かやらなければならないことがありますか？」

通常、この展開には使命が付き物だ。

世界を救えだとか、魔王を倒せだとか。

おっさんの懸念に、セレスティナは首を横に振る。

「私のミスで転生することになったというのがありますので、自由にさせていただいて構いません。それで、霧島さんに行っていただく場所というのは――」

異世界セレスティナ。

魔物があちこちにはびこり、剣と魔法によって独自の秩序が作られているという、不思議な世界である。

それからおっさんは、いろいろ考えた。

四十路よそじからの異世界転生。

どんなふうに生きるべきか。そしてどんな能力が必要なのか。

セレスティナは急せかすことなく、そんなおっさんを待っているのだった。

1 スキルを選ぶ

俺、憲人は頭の中を整理してから、女神様に尋ねることにした。

「俺が望むスキルをくださることですが……個数に制限がありますか？」

「霧島さんには、不便のないようにするつもりですが……そうですね。あまりに規格外的能力を持つて目立つのも大変でしょうから、十個までお願いします」

俺は頷きつつ思案する。

十個に制限するといっても、それでも多すぎるくらいだろう。とはいえ、適当に決めてしまうと良くない。

俺は再び女神様に尋ねる。

「能力に制限はありますか？ こういうのはいけないとか」

「影響が著^{きょう}しいものに関しては、制限を設ける場合もありますね」

いくらか制約があるとはいえ、随分と自由度が高そうだ。

「……わかりました」

俺はそう返事をする、この世界を生き抜くために必要なスキルが何か考えた。



しばらくして、何となく考えがまとまった。

「言葉を話せないと詰むので、【異世界言語】をください」

「それは元々与えるつもりでしたが……」

困惑げに口にする女神様に、俺は言う。

「女神様が言っているのは、人族の言語だけですよね、きつと？」

「ええ」

「俺が欲しいのは、すべての言語です」

「すべての言語？ それはどういう意味でしょうか？」

「俺がこれから行くことになる世界には、人族以外に様々な種族がいると思うんです。そういう存在とも交流できるようにしておきたいので」

女神様は納得したように頷く。

「ああ、そういうことですか。わかりました。特に問題はありませんので、そのようにします」

これで一つ目のスキルは決まった。

転生物のラノベを読んできた経験上、言葉の問題は何よりも大切だと思ったのだ。人族以外の種族とも、いろいろ関わることになりそうだし。

続けて俺は言う。

「二つ目ですが、物の持ち運びのために【アイテムボックス】が欲しいです。容量は決まってく、中に物を入れると、その物の時間が停止するようなやつが良いですね」

これも定番のスキルだと思ったのだが、女神様は困ったような顔をする。

「ええっと。【アイテムボックス】というスキルはあります。似た機能を持つアイテムもあります……容量制限がないのと、時間停止の両方を備えるスキルやアイテムはないんですね。セレスティードでは初となりますが……まあ良いでしょう。ただしトラブルを避けるために、見せびらかしたりしないようにお願いしますね」

「わかりました」

「他のも決まりましたか？」

慌ただしく促してくる女神様に、俺は告げる。

「三つ目は、【鑑定】が欲しいです」

「問題ありません。そのスキルは、職人や各ギルド員は持っていますね」

俺は「ギルド」という単語を聞いて、つい反応する。

「ギルドってやっぱりあるんですね」

「ええ。やっぱりと言うと？」

「俺の読んだ本で、よく出てくる設定だったんです」

「それだったら、説明は特にはいりませんか？」

俺は、話を進めようとする女神様に尋ねる。

「ギルドに入ると、そのギルド証が身分証になったりするんですね？ あとは、お金を預けたり引き出せたり」

「概ねその通りです。ギルドによって、ギルド証のデザインが異なるんです。ギルドに入るたびに、複数のギルド証を得ます」

「そっちのパターンですか」

「そっちのパターン？」

「俺が読んでいる本では、複数のギルド証があるパターンと、一つにまとまるパターンがあったんです」

「なるほど」

頷く女神様に、俺は【鑑定】を選んだ理由を説明する。

「少し話が逸れてしまいましたが、戻しますね。【鑑定】が欲しいと思ったのは、俺が住んでいた日本とは、名前や形が違う物があると思うんですよ。見覚えがある食べ物であっても、食べられる

かどうかかわからないと不安ですし」

「そうですね。では、【鑑定】を授けましょう」

「未知の食材とか道具とか……この歳ですが、期待が膨らみます」

いろいろ想像して楽しみにしていると、女神様は笑みを浮かべる。

「期待されると嬉しく思います。他には？」

俺は一息ついて答える。

「……四つ目は、【生産】スキルですね」

【生産】ですか」

「ええ」

「今までも地味な感じでしたが、それに輪をかけて普通ですね」

女神様的には、このスキルはそういう認識らしい。俺は、【生産】がいかに優れたスキルであるか説明する。

「そうでもないと思いますよ？　どんな場所で生きるのであれ、手に職がないと食べていきませんから。このスキルがあるだけで随分楽になると思います」

それから俺は【生産】で何ができるか説明した。

「スキルで武具を作ることでもできるでしょうし、極端に言えば家も作れるんです。この能力を用いて商売して生きていくことができますしね」

「なるほど。わかりました、そのスキルも付けます」

あとはどうしようかな。

そうしてすぐに、俺は次に欲しいスキルを告げる。

「五つ目は、【錬金】ですね」

【錬金】？」

「ええ。これも生活を潤すためのスキルになるのかな？」

「と、言うത്？」

「薬を作って売買できるかなと思ったんですよ。それに旅に出たりすると、急な怪我や病気が怖いので、ある程度自作できればいいかなと」

ちなみに俺にとって【錬金】は、金属を生み出せるほか、薬や調味料を作れるスキルというイメージだ。

セレスティータでもその認識で問題ないらしい。

「わかりました、【錬金】ですね。このスキルは薬師ギルドの職人が全員持ってますし、薬の売買も薬師の専売ってわけではないですね。商店の人も【錬金】を持ってることがあります。薬師ギルドの職人が作った物のほうが効果が高いついてだけです」

そこで、俺はふと思いついて尋ねる。

「薬や調味料以外の物を【錬金】しても大丈夫なんですか？」

「薬や調味料以外の物？」

首を傾げる女神様。

「ええ、金属とか宝石とか」

「……そうですね。金を作ろうとしたり、不老不死の研究をしたりしないのであれば、自由に【鍊金】を使っていたで大丈夫です」

俺は女神様の返答に安堵すると、次のスキルの話に移る。

「六つ目は、【全属性魔法】のスキルが欲しいです」

「全属性ですか!？」

「はい、全属性です」

これまでとは打って変わって、女神様は驚いた様子を見せる。

「うーん。全属性とおっしゃいますが……具体的に、どんな属性の魔法が欲しいとかがありますか？」

「火、水、風、土、氷、雷、光、聖、闇、無、治癒、精霊、従魔術、時空間、付与あたりですかね」

「……………」

絶句してこちらを見てくる女神様。

しばらく待ってみても、女神様はそうしたままだったので、俺は恐る恐る声をかける。

「あの？」

女神様はため息交じりに言う。

「……本当に、ほぼ全属性ですね」

「ほぼですか？ 何となく想像できていましたが……ちなみに、他にはどんな属性があるんですか？」

「魔物が主に持つてる毒と、奴隷紋どれいもんですね」

「やっぱりかあ」

「やっぱりって。わかってたんですか？」

「読んできた本から、大体想像できるんですよ。本では奴隷が出てきたりしましたが、奴隷紋はいらないですね。奴隷は、俺が暮らしていた所では馴染なじみのない文化ですし。毒もね、出てくる設定の物語はあったものの何となく忌避感きひかんがあって……」

すると、女神様は笑みを浮かべる。

「避けてほしい属性を避けてくれますね。うーん、それでもはつきり言って、セレスティーダの中で稀有ひゆな存在になりますよ？」

「そこはまあ、自衛の手段として必要なんで……魔物とかを倒しやすくするためですし」

「言いたいことは理解できますけど……しかし、うーん……」

「……だめですかね？」

「わかりました。ですが、できる限り自重してください」

「ええ、わかってます。自分に降りかかる火の粉を払うために欲したスキルですから、それ以外に使うつもりはありません。そもそも剣で戦えと言われても、何もできない気がするんです。これまで剣を持ったことすらないですし。せつかく異世界に来たのに、悪者に捕まっていいように使われる未来しか見えませんよ……」

いやホントに、そうだと思うんだよな。

気を取り直して、俺は次のスキルをお願いする。

「七つ目は、【調理】スキルです」

「これはまた、何と言うか……普通ですね」

そう言っ、首を傾げる女神様。

神様に対して失礼かもしれないが、可愛い仕草だと思ってしまった。

俺は苦笑いして答える。

「まあ、はい」

「これにした理由を尋ねても？」

女神様が訝しげに見てくる。

こんな視線を向けられるのは、今まで求めてきたスキルがよくわからない感じだったから仕方ないのか。

そう反省しつつも、俺はさりと告げる。

「まあ、単に自炊するためですね」

「は？ それだけですか？」

女神様は信じられないらしいが、本当にそうなのだ。いや自炊のためのこのスキルは、俺にとつて結構重要だった。

俺は女神様に向かって答える。

「ええ、それだけです。これから行く世界には俺にとって未知の食材があると思うので、自分で調理して食べてみたいんです。そのために【錬金】や【鑑定】も望んだので」

「え？ 【錬金】や【鑑定】がなぜ関係するのですか？」

女神様はますます混乱してしまったようだ。

俺は説明する。

「ああそれは、【鑑定】で食材を探したり、【錬金】で調味料を作ったりしようと思っっているんです」

「なるほど……それだったら、特に影響が少くないと思うので付けます」
疑ったわりに、女神様はあっさりと納得してくれた。

スキルを選んだけなのに、だいぶ時間がかかってるな。
でも、あと少しだ。

俺は女神様に次のスキルをお願いする。

「八つ目は、レベルやスキルの成長率を二十倍とかにする、【成長率上昇】スキルですね」

「……………」

目を見開いて凝視^{ぎょうし}してくる女神様。

調子に乗りすぎたか。

そう思って冷や汗をかきながら聞いてみる。

「……何か引っかけますかね？」

「さすがに倍率が高すぎるので、下げさせてもらいます」

「どうやら【成長率上昇】自体は大丈夫らしい。

俺は内心ホッとしながら、さらに尋ねる。

「何倍までなら可能ですか？」

女神様は考え込み、やがて口を開いた。

「……せいぜい五倍までですね。これでもかなりおまけして、です」

「わかりました、それをお願いします」

俺的には、多少でも上がりやすくなれば助かるなく程度の気持ちで提案したので、五倍でも万々^{ばんばん}歳^{さい}だ。

女神様の気が変わらないうちにさらっというこう。

次のスキルは自分自身の能力としてでなく、物として頼むことにした。

「では、九つ目ですが、地球とセレスティーダの知識を、すべて閲覧できるスキルを備えた物を

願います」

「!!」

女神様は驚愕の表情のまま固まってしまった。

しばらくしてハッとしたように我に返り、慌てて口を開く。

「な、何、何を言ってるのですか!」

ちよっとお怒り気味の声色になってるな。

「何をつて言われましても。必要なので希望を言ったのですが……」

「どう必要なのですか!」

女神様の目は若干掘^すわっている。

「いや、例えばですが……調理レシピとか鍛冶^{かじ}レシピとか錬金レシピとか? あとはセレスティーダの地図? スキルだけあっても、スキルの使い方や物の作り方がわからないと何もできないし、異世界で迷子になって餓死^{がし}するとか嫌すぎるので」

俺の言い分を聞いて、女神様も少しは納得してくれたいらしい。

女神様はさっきまでの怖い雰囲気をややよく解いてくれた。

「……地球の兵器の情報には手を出さない?」

女神様の心配はそこだったようだ。

俺は首を横に振って告げる。

「出しませんねえ。少なくとも、兵器に手を出すつもりはないです。いつそ、そうした情報に手を出せないように、凍結してもらっても結構ですよ？　でも、銃には手を出すかもしれません」

「銃に手を出すとは？」

これの返答に、俺はちよつと照れつつ答える。

「不確定なことなので何とも言いがたいですが……例えば大切な人ができたとき、銃を護身用に渡すかもしれませんし……」

すると、女神様は笑みを見せた。

「……なるほど、そういうことなら大丈夫です」

それから女神様は、付けてくれるという機能を説明してくれた。

俺は知識の閲覧だけをお願いしたのだが、女神様は通販のほか、様々な便利な機能を加えてくれるらしい。

「さらには『壊れない』『所有者固定』『たとえ盗まれても自動的に持ち主に戻ってくる』という機能を付けます。また、一月ごとに日本のお金で二十万円まで購入できる特典も付けましょう。あつ、この特典は繰り越しできませんので、覚えておいてくださいね」

「助かりますが……そこまでしていただいて良いのでしょうか？」

「ええ。地球の情報を調べた結果、地球に存在する食材のいくつか、セレスティードにはないと判明したんです。レシピを閲覧できても、作れないのは可哀想ですからね。それで、地球の物を購入入できるよう、おまけの救済措置を用意したというわけです」

「ちなみに、どんな材料がないのですか？」

興味本意で聞いてみると、女神様は答える。

「あなたの国のかれー？　に使われている香辛料と、デザートに使われてる甘味料などがないようです。なお、みそ？　しょーゆ？　の材料は名前こそ違いますが、セレスティードにもあります。そのうち【鍊金】で作れるようになるはずなのでご安心ください」

「ありがとうございます」

俺が頭を下げると、女神様が首を横に振る。

「良いのです。元々、私のミスでこのようなことになっているのですから」

そして女神様は、最後の確認をしてくる。

「他に欲しいスキルはないですか？　あと一枠ありますが」

しかし、俺の返事は決まっていた。

「はい、希望はすべてお伝えしました」

俺としては、ここまで優遇してくれるのであれば、これ以上は望みようがなかった。

女神様が念押ししてくる。

「本当に、ありませんか？」

「今は何も思いつかないです」

「では、保留しておいて、今後の話をしましょうか？」

ともかくこれですべてのスキルが決まった。あとは、俺がどういった所に転移させられるのか確認するだけかな？

俺はふと心配になって尋ねる。

「いきなり戦場のど真ん中とか、魔物の巣の中心とかに飛ばされるのは勘弁してほしいんですが……」

女神様が慌てて返答する。

「そんな所に送りませんよ」

それから、女神様は俺の転移先を提案した。

「冒険者になったばかりの子達でも、気軽に採取に行けるような林があります。そこから始めてみるのはどうでしょうか？」

俺は頷いて了承を示す。

転移場所はそこで決まったらしい。

さらに女神様が言う。

「あと服装なのですが、そのままだといらぬ注目を浴びることになると思うので、一般的な人族の

服装に着替えてもらいますね」

これに関しても問題ないので、俺は頷く。

「霧島さんから気になることはありませんか？」

女神様にそう問われ、俺はさっそく尋ねる。

「俺の能力や年齢はどうなりますか？」

すると、女神様はハッとした表情になる。

「ああ、そうですね！ まず年齢ですが、今の霧島さんはちょっと老いすぎなので、少し若返っていただきます」

「ええ！ 若返るのですか？」

俺が驚くと、女神様はあっさりと言う。

「そうですね。年齢自体は四十二歳のままですが、身体的には十歳くらい若返っていただきます。続いて能力のほうですが……比較しやすいように、あなたと人族の平均的なステータスを並べて見ていただきます」

女神様が準備を始める。

五分ほど待っていると、目の前に半透明のステータス画面が表示された。

種族	年齢	職業	レベル	HP	MP	体力	魔力	敏捷	器用	知力	攻撃	守備
人族	42	未設定	1	185	1600	163	150	1300	171	149	156	163
											(+10)	(+11)
				50	40	40	30	20	40	30	20	40
				60	40	50	50	40	60	40	30	50

それぞれの数値の下に載っているのが、人族の平均的な数値らしい。

各数値は通常の三倍くらい高いようだな。MPや魔力や知力が飛び抜けて高いので、後衛職寄り

と見て良さそうだ。

さらにステータス情報を見ていく。

装備… ナイフ、短杖、布の服、革靴、腰巻き

スキル… 【異世界言語（全）】【アイテムボックス（容量無制限&時間停止）】

【鑑定（極）】【生産（極）】【錬金（極）】【全属性魔法（極・詠唱破棄）】

【調理（極）】【成長率五倍】【タブレット】【交渉】【算術】【読み書き】

魔法… 火、水、風、土、氷、雷、光、聖、闇、無、治癒、精霊、従魔術、時空間

付与

装備は今も持っていないが、転移後にももらえるのかな。

スキル名の下についている（極）とか（全）とかは、そのスキルのレベルを表しているが……とにかく俺のスキルはすごいらしい。

なお、平均的なスキル保持数は二から四個とのこと。俺は、女神様からもらった九つのスキルのほかに、三つのスキルを持っていた。

リクエストしたわけじゃないが、俺は魔法を使う際に詠唱が必要ないみたいだ。

俺はステータス画面を見つつ、圧倒されてしまったのだ。

3 從魔^{じゆうま}に会う

ステータスの確認を終えたところで、女神様が言う。

「さて、霧島さんにあと話しておくことは……そうそう、從魔と精霊をそれぞれ一体ずつ付けさせていただきます。從魔はフェンリルで、いかなるときも霧島さんを守ってくれる、守護獸^{しゅごじゅう}になります」

「フェンリルって！」

驚きのあまりに叫んでしまう俺。

「どうしましたか？」

「いや、俺がよく読んでいた本では、フェンリルといえばドラゴンにさえ匹敵する狼だったもので」

「その認識で合ってます。なお、セレスティードでは聖獸^{せいじゅう}になります」

「……聖獸？」

戸惑う俺に、女神様は続ける。

「ええ。セレスティードでフェンリルは聖獸、つまり神の眷屬^{けんぞく}として存在しているのです。過去に從魔としていた人族もいるので問題ないかと」

「いやいやいや、問題ありますよ！ そんな目立つ存在を從魔にしていたら、確実に国とか貴族とかに目をつけられます！」

俺が必死に抗議すると、女神様は平然と言う。

「大丈夫です。神の眷屬と言ったでしょう？ セレスティードで神は、霧島さんの元の世界以上に畏^{おそ}れられているんです」

それから女神様は、セレスティードで起きたという出来事を話した。

かつてフェンリルを使役したという人物は、俺が言ったように国に目をつけられ、その力を利用してそうになったという。

しかし、神の怒りに触れ、それに関わった王族と大臣が命を落とした。

以来、セレスティードでは次のような言葉が広まった。

——聖獸と聖獸を従える者に手を出すことは、神への反逆と同義である。

女神様は一通り話し終え、笑みを浮かべる。

「この言葉は、私ではない神が地上の者達に向かつて言ったものです。とにかく、もし霧島さんがフェンリルを連れていくことでトラブルに巻き込まれそうになったら、あとで紹介する精霊を通して、私に連絡をください」

俺は頭を抱えて口を開く。

「……ちよっと、聞きたいことだらけなのですが。そもそも、セレスティードには幾柱の神がいるのですか？」

「私が主神として存在し、あとは様々な属性ごとに一柱ずつ神がいます。私だけでセレスティードを管理するのは大変ですからね。最初にも言いましたが、私が管理してるのはセレスティードだけではないので」

「言ってみましたね、いくつか管理してると。とにかくセレスティードにはたくさん神がいて、決まった領分があるということですかね」

「そうですね。例えば教会には、聖、光、治癒の神が関わっています」

「ああ、何となくわかりました。火山だと、火と土の神が関わっていいそうですし」

それから女神様は、精霊についての説明に移った。

「付くのはただの精霊ではなく、大精霊です。大精霊は、セレスティードの地理、歴史、常識を教え、霧島さんを導くでしょう。もし霧島さんが逸脱した行為に及んだ場合は……大精霊から私へ連絡が来ます。なので、あまり暴れないでくださいね？」

「なるほど。大精霊はナビゲーターの役割なんですね。あと、暴れないでくださいとのことですが……もちろん、そのつもりはありません。ただし大切な人を守らなくてはいけない場合は、どうなるかわかりません……」

俺がそう口にする、女神様はにっこりと微笑む。

「大切な人を守るためであれば、暴れてしまうのも仕方ありません。では、呼びますね」
それから女神様は正面をじっと見据え、声を発する。

「フェンリル、大精霊、ここに来なさい」

すると、女神様の目の前に魔法陣が現れ、強い光を発する。

数秒後、巨大な存在が姿を現した。

フェンリルは体長四メートルほどあり、威風堂々立っている。

その真っ白なフェンリルの頭上には、五十センチメートルほどの少女が座っていた。ピンク色の長い髪をためかせ、ピンク色のドレスを着たその子は楽しそうに笑っている。

女神様が優しく声をかける。

「よく来ましたね。さっそくですが、あなた達に仕事を与えます。こちらにいる霧島さんに従うように」

フェンリルが俺に視線を向ける。

それから首を傾げると、威厳ある声を響かせた。

『任務は受けるが……この者、弱くないか?』

脳に直接聞こえてくるようなその声に、女神様が応える。

「私のミスで、つい先ほどまで別の世界で生きていたのですが、セレスティーダに転生することになったのです。まだレベルは1ですが、強力なスキルを付与してあります」

フェンリルは俺をじっと見つめる。

しばらくして、納得したように告げる。

『確かに、とんでもないスキルを持っているな。わかった、その者に付き従おう。霧島さんと言ったか? 従魔契約のため、我に名をつけてもらえるか?』

突然名づけをお願いされて慌てた俺は、女神様に言う。

「フェンリルに名前をつける前に、俺の名前も変えて良いですか?」

「構いませんが、なぜです?」

不思議そうに首を傾げる女神様に、俺は理由を説明する。

「今のままの名前だと悪目立ちしそうなので、セレスティーダの人達が言いやすいものに変えようかと」

「わかりました。では、どのような名にされますか?」

「そうですね……」

俺は一瞬思索したものの、何かに導かれるようにその名を口にする。

「ミストランド。ノート・ミストランドでどうでしょうか?」

「良いと思いますよ! 確かに言いやすそうな気がしますね。ちなみに、どうしてその名にしたのですか?」

俺は一瞬ためらいつつ告げる。

「名字のほうは、霧島というのを英語にしたんです。霧がミストで、島がランドというふうに。ちなみに、英語は俺のいた国とは別の国の言葉です。名前のほうは音の響きだけを残して、それっぽくしました……」

話しながら気づいたが、俺に命名センスは皆無だな。

しかし、フェンリルと大精霊の名前はどうか……

フェンリルが不安そうに俺を見ってくる。大精霊はそわそわしているフェンリルを見て、ケタケタ笑っていた。

女神様が俺を促す。

「では、霧島さん……いえ、ノート・ミストランドさんの名前はそれで大丈夫だとして、次はフェンリルの名前をお願いします」

俺は悩みつつフェンリルのほうを見て、そして口を開く。

「……ヴォルフ、っていうのはどうです?」

すかさず、女神様が聞いてくる。

「意味はありますか？」

俺は、そんなこと聞かなくて欲しいつつ答える。

「……ドイツ語で狼を意味していたような？ あと、何となく言葉の響きがカッコいいかな？ と思っただけ……」

フェンリルが言う。

『安直だが、確かに響きは悪くないな』

俺はホッとして胸を撫で下ろした。

続けて女神様が言う。

「フェンリルの名は、ヴォルフで決まりましたね。では次に、大精霊の名前をお願いします」

「いや、一つ確認したいのですが……大精霊は何の属性なのですか？」

忙しなく急かしてくる女神様をいったん待たせて尋ねると、女神様の代わりに大精霊が直接答えられる。

『私は、特に属性を持っていません。あなたを補助する役割を担い、あらゆる魔法の知識を教えることになります。つまり、あなたが持つ属性すべて扱えるのです』

大精霊の声も、ヴォルフと同じように直接脳に響くような感じだった。

大精霊の返答に不安を覚えた俺は、女神様に尋ねる。

「……この大精霊、俺に従わせて連れていっても大丈夫なのですか？ 何だか随分、位が高そうな

のですが……」

「ええ、大丈夫です。少なくとも最初のうちは、あなたとヴォルフにしか見えないようにしますし」

そういう問題なのか？ と思いつつも、俺は大精霊に向かって言う。

「精霊さんはそれで良いの？」

すると、大精霊は可愛らしく首を傾げる。

『良いのって？ 地上に下りるのも久しぶりだから楽しみ♪』

「……まあ、本人が良いなら」

精霊の軽い反応に呆れていると、大精霊が急かす。

『それよりも、早く私にも名をつけて！』

俺は苦笑いしながら考え、そして告げた。

「……んー、マナはどう？」

『その意味ってあるの？』

「一応あるよ。確かいろいろな説があったはずだけど、マナっていうのは、万物の素となる元素を意味してるんだ。語感としても、君には合ってると思った」

『悪くないわね。でも、何で元素なの？』

「さっき確認したとき、属性がないって言ってたでしょ？ またその一方で、すべてを扱えるとも

だから、まさしく元素のようだと思ったんだ」

『わかった！ 私の名はマナです！』

マナがそう宣言した瞬間——フェンリルとマナに紋様が浮かび上がった。

これで従魔契約は完了したらしい。

女神様が笑みを浮かべて言う。

「すべて決まりましたね。それでは霧島さん……いえ、ノート・ミストランドさんですね。あなたのこれからは、幸福でありますように……」

女神様は少し名残惜しそうだった。

俺は女神様に向かって頭を下げる。

「いろいろ便宜を図ってください、ありがとうございます」
すると女神様は首を横に振って言う。

「こちらまで迷惑をおかけしました。それでは、先ほどお伝えした場所に送りますね。ヴォルフ、マナ、ノートさんを守ってくださいね」

女神様に声をかけられたヴォルフとマナが返事をする。

『承知した』

『わかってます。何かあれば連絡します』

直後、俺、ヴォルフ、マナを囲むように魔法陣が光り始める。

そうしてその光が俺達を覆うと、ほんの数秒だけ浮遊感があった。

しばらくして視界が戻る。

どうやら林の中で立っているようだ。

四十路のおっさんである俺は、ついに異世界セレスティーダに来てしまったらしい。

4 こぼれ話

光が収束していくのを確認しつつ、セレスティナは一人呟く。

「行かれましたか。何とか話をごまかせましたかね。とはいえ、空間の歪みを直そうとしたのは事実ですし、魔力の暴走も間違いないのですが……」

独り言であるにもかかわらず、セレスティナは声をひそめる。

「……実は、他の歪みに意識がいったから魔力制御が甘くなっていた、とは言えませんよね。かなり優遇したスキルを渡しましたが……ちょっとやりすぎましたかね？」

すると、彼女の後ろから声がかかる。

「優遇するのは仕方がないにしても、ミスの内容がまずすぎると思いますが？」

「っ！ いつ来たの？ びっくりさせないで！」

セレスティナに声をかけたのは、セレスティードの神の石柱。生物や鉱物を管理する神、ガイストである。

ガイストは呆れたように言う。

「いつ来たも何も、あの子がスキルを選び始めた頃には、すでにいましたよ」

「……そこからですか」

そう言って額に手を当てるセレスティナに、ガイストは真面目な表情で尋ねる。

「それで、どうするのですか？」

「どうとは？」

「すぐ死ぬような所には送ってないようだし、彼、人族の寿命に収まらないでしょ？」

「どういう意味ですか？」

わかっていないセレスティナに、ガイストはため息をつく。

そして、再び真剣な顔で言う。

「セレスティナ様、まさか自分の送った世界の特性、忘れてませんか？」

「特性？」

「セレスティードは魔力が高ければ高いほど寿命が延びる世界です。彼、レベル1でもそこそのレベルのエルフと同等の魔力を保持していますよ？」

「あっ!!」

しまった、という顔をするセレスティナ。

「……忘れてたんですね」

「彼に詫^わびて、スキルを与えるのに集中しすぎていましたわ」

「まあ、いくつもの世界を管理していると、多忙すぎて抜けることもあるでしょう」

「ど、どうでしょう？」

困惑するセレスティナに、ガイストは提案する。

「セレスティナ様は、手が空いたときだけ、セレスティードの様子を見られたらよろしいかと。あとは私が見ますので」

「お願いします」

こうして、ガイストがノートの見守りを買って出たのだが……

第1章

領都ファスティ

Yasoji no ossan,
Kamisama kara
cheat skill wo 9ko
morau

5 いろいろ確認しよう

「ここがセレスティータか……」

俺はそう言っただけで周囲を見渡す。周りには何の変哲もない木々が立っており、特に異世界らしい様子もない。

確認はしていないが、俺の見た目は多少若返っているらしい。

そういえば、体が随分と軽い。メタボ気味の体形だったはずだが、女神様が健康的な体形にしてくれたようだ。

服装はこの世界の住人に合わせて変わっていた。変な腰巻きが付いているのが気になるが……まあ良いだろう。

ヴォルフが尋ねてくる。

『主よ、これからどうするのだ？』

俺は何をすべきか考え、返答する。



「とりあえずは……いろいろ確認しようと思う」

『確認か？』

『何の確認？』

声を揃えて聞いてきたヴォルフとマナに、俺は答える。

「俺は、この世界のこと、この常識も、俺が持つスキルの使い勝手も、お前達的能力もわからない。だからまず把握しておきたいんだ」

二体とも納得してくれた。

俺はヴォルフに尋ねる。

「まずヴォルフに聞くけど、大きさって変えられるのか？」

『ある程度は可能だ』

『最小サイズと最大サイズを教えてください』

『最小一メートル五十センチくらいで、最大でおおよそ二十メートルくらいだな。一番動きやすいのが今の大きさだ』

「二十メートル!？」

驚く俺に、ヴォルフは平然と言う。

『ドラゴンと戦うには、それくらい大きさにならんとな？』

いやまあ、そうなのかもしれないが……

とりあえずヴォルフには、小さくなくてもらうことにする。

「ヴォルフ。悪いが、今の半分くらいの大きさになってくれるか？」

『造作もないが、なぜだ？』

「街に入るには大きすぎると思うんだ。珍しがつて人が寄ってくるかもしれないから」

俺が理由を説明すると、ヴォルフは急に凄む。

『我に刃を向ける者がいるというなら、受けて立つぞ？』

俺は頭を抱える。

「いや、いきなり女神様の手を煩わすようなことになるわ!」

『そんなものなのか？』

何もわかっていなそうなヴォルフ。

俺はマナに向かって言う。

「おーい、マナさん。ヴォルフの教育を頼んでいいか？」

『契約にはないけど、主に迷惑かけてるみたいだから、教えることにするよ』

ひとまず安心できた俺は二体に、これからの基本方針を伝えた。

・人には、できるだけ迷惑をかけない

・俺達に被害が出そうときは撃退するが、その判断は俺がする

- ・セレスティードならではの美味い物を食べる
- ・そのための収入源の確保をする
- ・旅をしながら、人との交流を楽しむ

「——今のところはこんなところだな。わかったか？ ヴォルフ、マナ？」
 二体とも頷く。

『承知した』

『わかったよ』

受け入れてくれたことだし、次の確認をするときしようかな。

俺はマナに声をかける。

「マナは、基本的に人に見えないんだよね？」

『そうよ。ついでに言っておくけど、主の補助がメインなので、戦闘能力もほぼないよ』

「それは……そういうふうにな女神様に制限されてると思ったなら良いのか？」

『そうよ』

いざとなったら多少は戦えるってことかな。まあ、そういう場面があればヴォルフがいるし、問題ないだろう。

別の質問をする。

「あと聞きたいのは、俺は身分証を持ってないけど、街には入れるのか？」

すると、マナは目を見開いた。

『あっ！ ごめんなさい。真っ先に言っておいて女神様に強くお願いされてたんだ。女神様が、お金を【アイテムボックス】に入れたって言ってたよ。そのお金で街に入れるし、入ったらどこかのギルドでギルド証を作れば、それが身分証代わりになるよ』
 なるほど、【アイテムボックス】か。

さっそく試してみようとしたが——出し方がわからない。

「マナ、【アイテムボックス】の使い方を教えてくれるか？」

『えっと……【アイテムボックス】って念じると、中に入ってる物が頭の中に浮かんでくるの。今度は、それを出そうと考えれば出てくると思うよ』

よくわからないが、やってみることにする。

マナに言われたように念じてみると、イメージが浮かんできた。

【アイテムボックス】

・金貨 × 10

・銀貨 × 30

・銅貨 × 100

とりあえず出したり入れたりを繰り返して、感覚を慣らす。

ちなみにマナによると、一般的な四大家族で一月の支出が金貨五枚とのことだ。

一応、手元には金貨十枚あるから、二、三か月くらいは持つんじゃないかな。ヴォルフがいるから何とも言えんが。

まあ、しばらくはやっていけそうだし、ギルドに登録して収入源を探すとするか。

俺はヴォルフとマナに話しかける。

「今は、こんなところかな。俺の戦闘力の確認は……あとで大丈夫だろう。ヴォルフに倒してもらえば良いだろうし」

『我はそれで良いぞ。この辺の魔物ならば、今の主でも余裕だな』

「そうか。でも、今日のところはヴォルフに任せるよ。何せ、数時間前まで戦いとは縁のない世界にいたんだから」

『承知した。向かってくる魔物は、我が確実に屠^{ほふ}ろう。あとな、この辺にはいないだろうが、悪意を持つ人の場合はどうするのだ？』

なるほど、人が襲ってくる場合もあるのか。

「……そういう奴もいるんだよな。そのときは、俺のスキル【鑑定】を使って判断するよ」

『承知した』

俺はマナに尋ねる。

「マナ、【鑑定】は対象をよく見たら発動するのかな？」

『そうですよ。練習のためにやってみましょうか。じゃあ、この辺を見てみてください』
マナに言われたのでやってみる。

雑草、雑草、雑草、雑草、雑草、雑草、雑草、
雑草、薬草、雑草、雑草、雑草、雑草、雑草

……ん？

雑草に紛れて薬草がなかったか？

さらによく見てみると、やはり薬草だった。

・薬草

×1

ポーションの材料になる。採取する際は、

途中で折れないように、根ごと引っこ抜くように注意する。

えーと、ポーションの材料になるのか。

根っこから折らないようにすると良いらしいから、その通りに採取する。